The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『とはずがたり』に見られる『夜の寝覚』摂取の様相 : 人物造型を中心に
Author(s)	阿部, 真弓
Citation	詞林. 1992, 11, p. 46-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67318
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『とはずがたり』に見られる『夜の寝覚』摂取の様相

――人物造型を中心に――

阿部　真弓

はじめに

『とはずがたり』は、昭和一五年世に紹介されたが、昭和二十年代にしてようやく人の目に触れるようになった研究史の浅い作品である。しかしながら、中世女流日記の中において、質、量ともに他を圧倒しているため、人々の関心を集めて、研究は急速な進歩を遂げ、現在ではその最高峰としての位置付けがなされている。

『とはずがたり』は先行文学摂取という分野においてはかなり研究が進んでおり、詳細な検証がなされている。これまでは和歌文学や『源氏物語』、『狭衣物語』を始めとした平安時代物語の影響についての論考が主であったが、最近は擬古物語という新しい観点からも検討され始め、『とはずがたり』の背景がかなり明らかになっている。

ところが、これまでほとんど俎上に乗せられることのなかった作品がある。『夜の寝覚』である。松本寧至氏が、その影響関係について、やや概略的ではあるものの、多くの問題点を写し出した、きわめて示唆に富む論文を発表されたのだが、それがほとんど唯一のものといってよく（1）、現在まで松本氏の論考に対する反応さえ世に示されていないような有様である。しかし、この問題をこのまま看過すべきではない。なぜなら、「宮廷篇」と称される巻一から巻三において、『夜の寝覚』は、『源氏物語』に匹敵するほどの、いやむしろそれ以上の多大な影響力を持っていたと考えられるからである。

『とはずがたり』における『源氏物語』や『狭衣物語』からの享受は枚挙に暇がない。しかし、それは文辞や個々の場面という単位であることも多く、やや皮相的な摂取利用と見える場合も少なくない。それに対して『夜の寝覚』からは、一貫性を保ちつつ構成ごと摂取し、それらをテーマの中枢部に骨格として再構築していると考えられるのである。

本稿では、『夜の寝覚』の内容と対応する場面を持つ『とはずがたり』巻一から巻三における作者二条の私的空間に的を絞

って、特にこの物語からの影響が著しいと思われる人物造型の面から考察したい。『とはずがたり』の主要人物にはそれぞれ『夜の寝覚』の影がちらついているのであるが、小論においては、作者二条の愛人であった「雪の曙」、「有明の月」という二人の造型に焦点を絞って検討する。『夜の寝覚』の影響を分析し、それらの要素がいかに有機的に機能しているかについて「雪の曙」と「有明の月」の造型を通して考えていきたい。これまで『源氏物語』の威光に隠れていたためにあまり注目されることのなかった『夜の寝覚』の役割を積極的に評価することで、作者の内的世界の心髄により肉薄していこうという試みである。

『夜の寝覚』は中間と末尾に大きく欠巻があり、資料としては不備な部分があることは否めない。しかし、そのことを遺憾と考えるのみの段階に留っているよりも、限られた資料をもとに最大の成果をあげるべきであると考える。

一　「雪の曙」の造型について

『とはずがたり』において、作者二条は、愛人二人を「雪の曙」、「有明の月」と、仮名を使って表現している。

「有明の月」については、現在もその人物を特定するための議論が行われているような状況であるが、むしろそのためにか、彼の造型には関心が寄せられ、研究が活発に行われてきた。

一方、それとは対照的であるのが「雪の曙」で、彼が西園寺実兼であることが、基礎研究の段階で玉井幸助氏、松本寧至氏らによって解明されている。が、それが徒となってか漠然と「貴公子的」、また「二条にとっての理想的男性」などと称されることが多く、その造型は『源氏物語』、『住吉物語』の影響下にあるとされてはいるが、まとまった研究が特に見当らないのが現状で、他の人物論研究に較べて、やや立ち後れているといった感は払拭できない。二条が「雪の曙」の描写に細心の注意を払っていることは、彼を公人西園寺実兼として登場させる時には官職名で表現している例からも端的に理解でき、二条の脳中では、かなり綿密な人物像が構築されていたことが窺える（2）。よって安易に「貴公子然とした」と評するのは、あまりに軽率なことといえよう。

彼の造型には、これまで指摘されてきた作品以外に、先述の如く『夜の寝覚』の影響がきわめて顕著に現れている。この節では本物語との関係をより詳しく検証していき、それぞれの要素が、いかにして「雪の曙」像として構築されているかについて、考えていきたい（3）。

まず『とはずがたり』に描写されている全ての「雪の曙」の行動と関連事項を以下に要約、列挙する。

〈巻一〉

①御所の新年に、父雅忠御薬の役に参り、二条の件について後深草院と密約を取り交わす。その夕、「雪の曙」が二条に衣装と文を贈る。彼女は拒絶するが、結局受納する。
②後深草院が雅忠邸を訪問。二条、一晩目は院に従わず。その翌日、事情を誤解した「雪の曙」より恨みの文が来る。
③二条、皇子懐妊。父雅忠没。その約一ヵ月後「雪の曙」来訪し、二条と南面にてしみじみと語り明かす。
④父の四十九日以後、二条は乳人の家に寄寓する。その折に「雪の曙」と初めて契る。翌日も彼の訪問があり、しばらく関係が続く。
⑤二条が籠る醍醐勝倶胝院に後深草院訪問。数日後の雪の夕暮、物思いに耽る二条を尼達が慰めている所に「雪の曙」が来訪する。二条は彼を拒むが、尼達のとりなしで入室を許す。翌日も「雪の曙」は帰らず、尼達に貢物を贈る。
⑥二条が里下りの折、「雪の曙」が訪問し、翌日も滞在する。そこに院より疑惑の文が届く。二条と「雪の曙」、ともに油壺を二条の懐に入れるという懐妊予知夢を見る。
⑦二条、「雪の曙」の子を宿したことを知る。彼と共に善後策を練る。
⑧里下りした二条に「雪の曙」が着帯し、三日間付き添う。
⑨二条、院御所から退出。院には重病と偽り、「雪の曙」の女児を出産。公には流産と称して、「雪の曙」が子供を自邸に引き取る。
⑩玄輝門院が院に召される晩、「雪の曙」が二条の局に忍び、契りを結ぶ。

〈巻二〉

⑪「雪の曙」春日大社に籠もり、霊夢を得て、失踪中の二条（妊娠中）を醍醐に探し当て訪問する。出家の意志堅固な二条を御所に帰るよう説得する。翌日、二条の叔父隆顕と酒宴。二条、伏見に戻る。「雪の曙」、二人の間の子との対面を約束する。その後、二条は御所に連れ戻される。
⑫「雪の曙」、二条に女子を対面させる。
⑬今様伝授に二条も供奉。「雪の曙」が二条の衣装を用意する。

〈巻三〉

⑭二条が墓参のため里居している時、「雪の曙」が来訪するが、御所付近出火のため、あわただしく立ち去る。
⑮「有明の月」と院の間で悩む二条に、「雪の曙」が恨みを述べる。
⑯二条、院の隔てを感じる。「雪の曙」のみ温かい言葉をかける。
⑰院御所退出の命を受けた二条を、「雪の曙」が慰める。

実は、以上の「雪の曙」の行動と『夜の寝覚』の男主人公のそれとを照合すると、両者間のきわめて高い類似性を看取することができる。現存部のみの確認となるが、右のことを示すため、次に『夜の寝覚』の男君の行動から、「雪の曙」と類似の

行動及び関連事項を抽出し、対応場面を指摘しよう。

〈巻一〉

a男君、中君出産の処置に心を砕く。姉中宮に、生まれた子を父関白邸に引き取ることを打ち明ける。（⑦と類似する。）

b男君、病気と偽り部屋に籠る妊娠中の中君の許に忍び入るが、引き離される。翌日も見舞う。（④⑤に通じる。）

〈巻二〉

c中君の出産近づく。平癒祈願と偽り石山に参籠し、さらに兄宰相中将の乳母であった尼の家に移る。（男主人公の行動ではないが、展開として⑨と符合する。）

d男君、忍んで石山にいる中君を見舞い、南面で対の君に対面。中君をかき口説きつつ一夜を過ごす。（③に通じる。）

e男君、生まれた姫君を引き取り、乳母の家に移し、その後関白邸に迎える。（⑨と符合する。また、乳母をつけることを、女児の引き取りを前提とした行動と考えるならば、⑧も類推される。）

f雪の深い日、中君は京を偲んで嘆く。その夕刻、男君は中君を訪ねるが逢えず。ライバル宰相中将の訪れにも嫉妬しつつ、空しく一夜を明かす。（⑤に通じる。）

〈巻三〉

g太皇宮の奸策により、帝が寝覚の上の許に忍び入るが、彼女は拒み続け、危機を脱する。男君誤解し、煩悶する。（②と符合する。）

h督の君が帝に召された隙に、男君が寝覚の上の許に忍び込み、契りを結ぶ。（⑩と符合する。）

〈巻四〉

i夜が明けたが、男君寝覚の上の傍を離れず。そこに帝から恨みの文が届く。（⑥と類似する。）

j寝覚の上、宮廷より退出。男君が寝覚の上を来訪したところに帝より文。（⑥と類似する。）

k男君、石山の姫君を北殿（故関白邸）に伴い寝覚の上に対面させる。（⑫と符合する。）

l寝覚の上、生霊事件を聞き、広沢の父入道の許に移る。男君は後を追うが、対面できず。その際、帝からの文を見る。（⑤⑥と類似する。）

〈巻五〉

m寝覚の上、父入道に出家の決意を述べる。男君は二人の子供を連れて広沢に急行し、出家を思い止まらせんとする。寝覚の上が妊娠していることがわかり、自邸に迎える。（⑪と符合する。）

n帝からの督の君出産の慶賀に、寝覚の上はじめて返事する。男君、それに嫉妬して、寝覚の上のもとに赴き苛む。（②⑮と通じる。）（4）

このように、単なる偶然とは片付けられない程、まとまった形で取り出すことができる。「雪の曙」の行動十七項目の内、『夜の寝覚』の男君とオーバーラップしないものは、①⑬⑭⑯

⑰のわずか五項目である。また逆に『夜の寝覚』に照合すれば、類似部分は全編を通じて点在し、なおかつ、それらの項目は、物語の輪郭を描くことができるほどの重要な場面を、換言するならば、『夜の寝覚』の男君の主人公たる特徴を明確に浮き上がらせる内容を含有していることが理解できる。話の展開が異なるため、それぞれの順序には違いが見られるが、このように、「雪の曙」の貴公子像が『夜の寝覚』の男主人公という一人物の姿にほとんど寸分違わず重なり合うことを示す例証からは、彼にはかなり『夜の寝覚』を意識した造型が施されているという解釈を導き出すのが妥当であろう（5）。③④における男性は「雪の曙」ではなく他の高貴な人物や「有明の月」とする説もある。多くの研究者の反論があるように、これらの説には問題点も多く、現在論点の一つとなっているが、如上の構図が浮び上がってくると、やはりこの男性は「雪の曙」と考えるべきである。

個々の場面には『源氏物語』等の影響も指摘されているが、これは右のことと齟齬を来すものではなく、それらの物語から享受したものは、人物造型の、いわば肉付けの役割を負った存在であると考えられる。詳細な考証が必要であるが、「雪の曙」の造型は、『夜の寝覚』の男主人公を骨組みとし、他の先行文学から摂取した要素で細部を彩るといった重層構造を備えているという推論も成立するだろう。

「雪の曙」の造型の骨格に、『夜の寝覚』の男主人公を意識して投影した理由としては、単に物語の貴公子のような洗練された人物として描き出すためのみならず、彼の存在の正当性、重要性を主張する必要があったということが考えられる。つまり、二条の意識の上では『とはずがたり』前編の男主人公役を担っているのは、後深草院や「有明の月」等ではなく、「雪の曙」に他ならなかったことを示唆しているのではなかろうか。

『夜の寝覚』で、寝覚の上は、老左大将と婚姻関係を結び、後には帝の誘いを受けるが、苦悩しつつも最初の男性である男君との関係を続ける。彼との交渉は寝覚の上にとって秘すべきゆゆしき事態ではある。しかし、物語は、老左大将や帝中心に進行するのではない。男君は、苦渋に満ちた世で寝覚の上と終始一貫した関係を持つことによって、その男主人公としての地位を不動のものとしているのである。

二条は、後深草院の寵姫ではあるが、「有明の月」、近衛大殿とも関係を持ち、一方で「雪の曙」との交渉を続けていく。留意すべき点は、この多彩な男性関係の中で後深草院に秘すべき人物は「雪の曙」のみであったという事、そして父亡き後、終始一貫して陰のパトロンでもあったという事実である。二条は、「雪の曙」を、『とはずがたり』の中で『夜の寝覚』の男君に擬することによって、後深草院に対比された二条の「愛人」というマイナスの役割ではなく、物語の男主人公という、より強い存在感のあるべき人物として、造型しようとしているのだと考えられる。

これまで「雪の曙」は、二条の「初恋の人」として重要視され、同時に清麗な貴公子、人格者として高い評価を受けてきたが、むしろそのイメージが災いしてか、後深草院の存在の大きさや、強烈な「有明の月」の影に隠れてしまい、やや後手に回った印象を受ける人物でもあった。しかし、彼は実際に経済的にも精神的にも両親のいない二条をささえてきた人間であり、彼女にとっては、やはり誰にも代えがたい特別な存在であったと考えられる。その造型における『夜の寝覚』からの影響を読み解くことによって、彼の位置が具体的に明らかになるのである。

二　「有明の月」の造型について

「有明の月」は巻二から登場し、二条の愛人として異彩な光を放っている。本文より後深草院とかなり親しい関係にあった真言宗僧侶とわかり、後深草院異母弟、仁和寺の性助法親王というのが有力な説であるが、開田准后法助であるという説もあり（6）、現在もいわば作者二条の事実の脚化に翻弄された状態である。が、これがかえって、彼に関心を集めさせる要因の一つともなって、その造型や位置付けについて、さまざまな角度から研究が進展し、未だに論議の的となっている。

この節では、彼の造型要素の一つに光をあて、ある仮説を提示したい。筆者は、「有明の月」の主として精神面での祖型を、『夜の寝覚』における寝覚の上に執心する帝に求められるのではないかと考えている。帝は、『夜の寝覚』中間欠巻部から登場する主要人物で、末尾欠巻部においても、かなり重要な役割を担っていることが推測されるのだが、残念ながらそれを確認する手立てはほとんど残されていない。しかし、彼の性格の特徴は現存部にも如実に現れており、論を支えるに十分な例証を得ることができると思われる。

現存部の検討に入る前に、現在推察されている中間欠巻部での帝に関連した記事の粗筋を示しておこう。帝は中君の琵琶の音色が妙なることを耳にし、彼女の入内を強く希望するが、中君の父入道ははかばかしい後見がないことに躊躇し、それを断る。結局中君は老左大将（後に関白）に嫁がされるが、彼が亡くなったことをきっかけに、再び帝は内侍督として入内することを希望する。しかし、またもや寝覚の上は受け付けず、義理の娘（故関白長女）が代わりに入内することとなった。現存部はその話を受け継ぐ形で始まっている。

〈巻三〉

①娘に付き添い参内した寝覚の上に、帝はたびたび故関白のことを持ち出して接近しようと試みる。

②寝覚の上を垣間見する機会を得て、ますます思い募る帝は、太皇宮の画策によって、寝覚の上との逢瀬を持つことができた。帝は、やはりまず故関白の話を出し、彼女の警戒心を解

かんとする。

昔より、思ふ心をむなしうないて、年ごろを経て、思ひわたるさま、故大臣、親しかるべき人といふなかにも、幼くより、分きて親しうならひ思ひて、御事を限りなく思ひけるままに、『なからむ後、かならず尋ね知りきこえよ』と、心苦しかりける女どものあまたありけるをば、さも言はず、ただ御事をのみいみじう。折々の事もきこえ出で、恋しき昔の形見とも思ひて、渡るたびごとに消息きこゆれ。

③言葉を尽して口説くが、寝覚の上の意志は強い。帝は心を静めて説得し、ようやく衣を引き交わすまでに至る。

④寝覚の上の美しい姿に帝は思いを深くし、あらぬことまで考えつめる。

これも、『あるまじ、便なし』と、世にも言ひそしり、人もそねみ言はば、国の位を捨てて、ただ心のどかに心をゆかせて、起き臥し契り語らひてあらむに増すうれしさ、ありなむや

⑤結局、思いを遂げられぬまま還御することにするが、この恋を成就する決意を表白する。

さはれ、世にあるまじきことと、そしり深く、内の大臣も便なげに思ひたらば、『かうところせからず、心やすきさまにて、また人をも並べず、起き臥し見馴れむに、増すことはあらじ』となむ、思ひなりにたる。これに懲りたまふとて、内などに居ること難くなりたまひたらば、ただ今年のうちにこの位をも捨てて、八重たつ山の中を分けても、かならず思ふ本意かなひてなむ、やむべき。いみじく思ふさまに定まり果てたまひぬとも、それを、さて聞くべきにもあらず。『人の見聞かむところなども、よろしくたどるべきわざにもあらざり』と、すべて現心もあるまじければ、『我も人も、いたづらになるべかりけることの様かな』となむおぼゆる

⑥またの逢瀬を約束し、寝覚の上の扇を形見に取るが、未練のためその場を離れがたく、彼女を帰すことにする。

かへすがへす、「明日の暮を、ただかやうに」と、のたまはせもやらず、ただ扇ばかりを形見に取らせたまひて、許させたまふほど、言へば世のつねなり。

⑦ようやく帝から開放され、寝覚の上は「ただ、のがれ出づるうれしさに、また心地もまどふばかりおぼえて、『今だに、とく、この憂き瀬を離れなむ』とおぼせば、いとやをら出でたまふに」と早々に退出しようとする。しかし、帝は彼女を再び引き止める。

よきほどに、ゐざり出でたまひぬるを、陰のかたにひきとどめさせたまひても、（中略　歌の贈答）「などて。をこがましく。かかる逢瀬は難くこそあらめ。あながちに心苦しさを見知りつるぞや」と、悔しく、いみじくおぼさるるに、人目苦しからずは、やがてたちつづきぬば

かりの御心地ぞ、せさせたまふ。

一方寝覚の上は、「登花殿に帰りたまひて、督の君の御方にうち臥したまひて、恐ろしからむ夢の覚めたらむ心地して、今も、現ともおぼえずぞ、あさましきや」という状態に陥っている。

⑧帝は後朝に次の歌を贈る。

見やしつる見ずやありつる春の夜の
夢とて何を人に語らむ

〈巻四〉

⑨寝覚の上からの返歌はなく、帝は自分の愚かさを悔やむ。

「かばかりの心にては、さりともと頼みをかけ、後の逢瀬をこがましかりけりかし」と、いみじう悔しう、妬うおぼしめされて

⑩帝の執心はいや増すが、寝覚の上は決してそれに応える事がない。再三彼女のもとへ呪詛的な恨みの文を送り付ける。

「さりともかならずおぼし知りなむ、とおぼえしもてなしを、我たけう、をこがましくおぼし離れ、一行の御返りもなくのみあるは、あさましう、後瀬の山の頼みもあるまじかめるを。なにの人目か。ただ心にまかせて乱れたる人の上なりとも、すこし世のつねにてこそ思ふべきわざなりけれ。昨日今日のやうに、もののおぼえば、いみじくおぼすさまに隙間なく定まり果てたまひぬとも、さてはあべうもあらず。きこえしやうに、ところせき位なども、ひたぶるに捨てむとなむ思ふ」（中略）

「鳴の海や潮干にあらぬかひなさは
みるめかづかむかたのなきかな
来む世の海人」

⑪上の御文の、中なるを見るより、胸つぶるるを、この世、かの世をかけて恨みつくさせたまひつるさま、見る目も及ばぬまで、いみじくかたじけなげにて、

「絶えぬべき命のなほも惜しきかな
人に負けじと思ふばかりに

身をし絶えずは」と、憂はしげに、のろのろしげにさへ書かせたまひたるさま

⑫帝は思いを胸に納めておくことができず、中宮にまで打ち明ける。

「いみじく妬くおぼゆるを、いかでこの本意かなへてしがなとこそ思へ」（中略）「……げに、思ひもかけず、ゆくりなきほどといひながら、さやはあるべき。限りなくめざましかりける人よ」

⑬寝覚の上は父のいる広沢にて身をひそめるが、そこで病（実は悪阻）に臥せる。（以下巻五）帝はそこに男主人公がいることを知っていながら、文を遣わす。それを読んだ男主人公は次のような感想を洩らす。

いで、あなのろのろしの御言や。かくのみおぼしわたるけに、御心地もかかるにや

⑭寝覚の上と男主人公との間はますます密接な関係となっていくが、帝は彼女を忘れることができず、寝覚の上を得るためには譲位さえ辞さない覚悟である。

いかで位を疾う去りて、すこし軽らかなるほどになりて、いみじき大臣のもてなし限りなしといふとも、いま一度の逢瀬を、いかでかならず

現在の現存部における主な帝の行動、言動は以上である。このように彼の寝覚の上への執心は、束縛された不自由な身ということもあって、いささか狂気じみており、「『……かばかりいみじく従ひきこえたる心の痴れ痴れしさを、おぼし知らぬものならば』と、よろづに恐ろしげに誓ひ聞かせたまひつつ」（巻三　二人の逢瀬の場面）と、おどろおどろしい雰囲気までも漂わせている。

では、次に『とはずがたり』における「有明の月」の存在がいかなるものであるか、『夜の寝覚』の帝との類似性を確認しつつ、示すことにする。

巻二において二条と「有明の月」は、後白河院御八講の折に、初めて見参する。

何となき御昔語り、「故大納言が常に申し侍りし事も、忘れずおぼしめさるる」など仰せらるるも、なつかしきやうにて、のどのどとうち向ひ参らせたるに、何とやらん、思ひの外なる事を仰せられ出して（①②に類似する。）

その折には辛うじて彼の手を逃れた二条であるが、後深草院の延命供に参上した「有明の月」は再び二条に口説きかけ、彼らはあわただしいひとときの逢瀬を持った。

見つる夢の名残もうつつともなき程なるに、「時よくなりぬ」とて伴僧ども参れば、後の方より逃げ帰り給ひて、「後夜の程に、今一度、必ず」と仰せありて（⑥と符合する。）

その夜二人は再び契り、暁を迎える。

むせかへり給ふ気色、心苦しきものから、明け行く音するに、肌に着たる小袖に、わが御肌なる御小袖を、強ひて「形見に」とて着換へ給ひつつ（③⑥と符合する。）

局に戻った二条は小袖の褄に、次の「有明の月」からの歌が入っていることに気づく。

うつつとも夢ともいまだ分きかねて悲しさ残る秋の夜の月（⑧に趣向が似る。）

明日が結願という夜、「有明の月」は自分の愛念に対する決意を述べる。

「…同じ心にだにもあらば、濃き墨染の袂になりつつ、深き山に籠りゐて、幾程なきこの世に、物思はでも」など仰せらるるぞ、あまりにむくつけき心地する。（④⑤⑩⑭に類似する。）

二条は「有明の月」に対して積極的な気持ちを抱けず、その後彼からの手紙に返事はするものの直接逢うことは避けていた。次の年、叔父隆顕からの呼出に応じたが、それが、実は「有明

の月」の窮策であることに気づかされる。（②における帝と寝覚の上の逢瀬のきっかけに類似する。）

彼の口説きにも二条は冷淡で、別れの時が近づいても「人は悲しき事を尽して言はるれども、わが心にはうれしきぞ」と心を動かされない。（⑦の寝覚の上の心境と符合する。）しかし、一方の「有明の月」は暁の別れに未練を隠せない。

帰り給ひなどするが、また立ち帰り、さまざま仰せられて、

「せめては見だに送れ」とありしかども、「心地わびし」

とて、起き上がらず。泣く泣く出で給ひぬる気色は、げに袖にや残し置き給ふらんと見ゆるも、罪深きほどなり。

（⑦に類似する。）

二条は隆顕の意向もおもしろくなく、「いたく白々しくならぬ先にと、公事にことづけて急ぎ参りて、局にうち臥し」ていると、「まめやかにありつるままの面影のそばに見え給ひぬるも恐ろしきに」と「有明の月」に脅威すら覚える（7）。（⑦における寝覚の上の行動、心情と酷似する。）

その後も「有明の月」より再三の誘いがあるが、二条に応答する意志はない。やがて、隆顕を通じて「有明の月」より起請文が送られてくる。

……いかなる魔縁にか、よしなき事ゆゑ、今年二年、夜はよもすがら面影を恋ひて涙に袖を濡らし、本尊に向ひ持経を披く折々も、まづ言の葉を偲び、護摩の壇の上には文を置きて持経とし、御灯明の光にはまづこれを披きて心を養ふ。この思ひ忍びがたきによりて、かの大納言に言ひ合せば、見参のたよりも心安くや、など思ふ。またさりとも同じ心なるらんと思ひつる事、みな空し。この上は、文をも遣し言葉をも交さんと思ふ事、今生にはこの思ひを絶つ。さりながら、心の中に忘るる事は、生々世々あべからざれば、われ定めて悪道に堕つべし。されば、この恨み尽くる世あるべからず。（中略）この力をもちて、今生永く空しくて、後生には悪趣に生れあはん。（⑩⑪と符合する。⑨⑫⑬⑭にも通じる。）

この後、二条と隆顕は一時不遇の身となってしまう。そのことについて「かかる事の出で来ぬるも、まめやかに報いにや」と隆顕が語る場面がある。（⑬に類似する。）

さて、二人はしばらく没交渉となるが、巻三に入り、後深草院姫宮（後の遊義門院）の病気平癒の祈祷をきっかけに、二人の関係は院を巻き込んで再燃し、二条は「有明の月」の胤を宿してしまう。「有明の月」は後深草院に自分の妄執と覚悟を語る。

若宮を一所渡し参らせて、われは深き山に籠りゐて、濃き墨染の袂になりて侍らん。（④⑤⑩⑭に類似する。）

二条が乳母の家に退出すると、「有明の月」は人目も意に介さず、忍んでくる。

「身のいたづらにならんもいかがせん。さらば、片山里の柴の庵の住家にこそ」など仰せられつつ、通ひありき給ふ

ぞ、いとあさましき。（④⑤⑩⑭に類似する。）

二条が出産した後、伝染病の流行に無常を感じた「有明の月」が忍び来て、言い契る。

・形は世々に変るとも、逢ひ見る事だに絶えせずは、いかなる上品上生の台にも、共に住まずは物憂かるべきに、いかなる藁屋の床なりとも、もろともにだにあらばと思ふ（④⑤⑩⑭に類似する。）

・五部の大乗経を手づから書きて、おのづから水茎の跡を一巻に一文字づつを加へて書きたるは、必ず下界にて今一度契りを結ばんの大願なり。いとうたてある心なり。この経、書写は終りたる、供養を遂げぬは、この度一所に生れて供養をせんとなり。龍宮の宝蔵に預け奉らば、二百余巻の経、必ずこの度の生れに供養をのぶべきなり。（中略）いさや、なほこの道の名残惜しきにより、今一度人間に生を享けばやと思ひ定め、世のならひいかにもならば、空しき空に立ち昇らん煙も、なほあたりは去らじ。（④⑤⑩⑫⑭に通じる。）

彼の不安は的中し、病死するのである。

以上の如く、「有明の月」と『夜の寝覚』の帝との間には、かなり顕著な類似性が看取され、その影響関係を認めてよいだろうと思われる。しかし、第一節にて述べた「雪の曙」にみられた摂取の様相とはやや性質が異なり、『夜の寝覚』からの影響は、行動面もさることながら、人物造型の根源的位置を占める性質面により深く関与している。言うなれば「有明の月」のきわめて特徴的な性向は、『夜の寝覚』の帝の一途な性格を継承していると考えられる。恋の成就のためならば、帝の位を捨てることも、来世で海人になることさえも厭わないという『夜の寝覚』の帝の姿は、二条の中で咀嚼され、「有明の月」の、二条のためには高僧という地位からの没落も辞さない、来世をも必ず共にという悲痛なまでの妄執へと再形成された。そうした営みが施されたことによって、「有明の月」という人物には命がふきこまれ、その結果『とはずがたり』の中で、彼は強烈な存在を一際輝かすことが可能となったのである。

そしてさらに注意すべき点は、その性格が起因として存在するからこそ、破滅という後の展開への構図が成立することである。二条との関係が後深草院に発覚した後も、「有明の月」の態度は変わることはなく、むしろ彼の妄執は凄味を増す。そして、光源氏の存在という外的要因に押し潰された『源氏物語』の柏木とは異なり、「有明の月」は自身の内なる炎に燃え尽きる如く自滅していく。『夜の寝覚』の帝のように恋の成就のためには身の破滅をも辞さないと誓った彼は、二条との間に子供まで為したからには堕ちるところまで堕ちていかねばならなかった。彼がこのような性向を負わされた時点で、破滅は必然の展開であったのである。『夜の寝覚』が関与するのは性質という人物の持つ一つの側面にすぎないが、しかし右のことから

「有明の月」の人物造型、ひいては『とはずがたり』におけるこの物語の重要性、意義が理解できよう。

筆者には、「有明の月」の造型における『源氏物語』の柏木の役割を完全に否定したり、先蹤説話に見られる女犯破戒僧のイメージを無視しようという意図はない。個々の場面においては、「有明の月」の柏木の姿を示唆する文辞、また説話的破戒僧としての人格を見せる表現があって、彼の造型の多元性を窺うことができるからである。筆者が主張したいのは、「有明の月」の造型要素の一つ、内面描写の中枢部に『夜の寝覚』の帝が据えられているということ、そして『とはずがたり』におけるその構図の重要性であることを確認しておく。

なお臆見を付言しておくと、帝の人物造型の手法同様「有明の月」のモチーフが繰り返し繰り返し語られるのは、二者の同一性を強調せんがための作者の企みでもあると推察される。想像をたくましうすれば、それは読者にもそう読まれることを期待した一種の謎かけではないか、すなわち皇統なるが故の悲劇の男性としての要素を持つ「有明の月」の正体は、法助ではなく後深草院の異母弟性助法親王であることを暗示しているのではないかとも考えられる。

まとめとして

以上はなはだ羅列的であるが、「雪の曙」と「有明の月」の造型に『夜の寝覚』が多大な影響を与えていることを論じてみた。

これまでも、諸研究者に指摘されてきたように、女性を主人公とし、その生きざまを描いた物語というのは、少なくとも現存作品中では『夜の寝覚』以前に見当らず、そうした意味でこの物語は独特の位置を占める存在である。『夜の寝覚』の際立った特徴は心理小説的と評される程の、心中描写の長大さ、深遠さにある。まさに「女君の心や自省の詳密な描写は、物語というより、むしろ女流日記的であり、自照的・自己凝視的である」（8）と評されるべき作品であって、二条がこの物語に造詣が深かった事は想像に難くない。『とはずがたり』を執筆していく上で参考にすることが度々あったと考えても、それが単なる臆測ということはないであろう。

「雪の曙」と「有明の月」の造型には『夜の寝覚』に一致する事象が多分に存在し、そこに「影響」や「摂取」といった語が適合可能かどうか疑問にも感じられる。つまり、『とはずがたり』研究でたびたび議論される、事実か虚構かという問題が生じてくるであろう。しかし、重要であるのはそのような範囲や境界の問題ではなく、作者がどのように人物を構築し、表現したかということである。たとえ我々が言うところの虚構があったとしても、作者二条の内的世界においてそれは事実である。

『夜の寝覚』の摂取利用によって「雪の曙」「有明の月」は、まさしく血の流れる存在として構築されることになった。つまり「事実」は、この場合『夜の寝覚』という取捨選択の基準を通過し脚色されることで、作者にとっての「真実」となり、『とはずがたり』に結晶したのである。

『とはずがたり』は、現実とは異なった次元の、虚と実の狭間に漂うかの如き特異な世界、事実に基づくフィクションの世界であって、ある程度事実とは切り離して考えるべきである。またそうした認識を踏まえて解釈していくように我々は努めねばならないであろう。

冒頭にも触れた如く、『夜の寝覚』は、本稿に取り上げた二人物の造型のみならず、他の重要な登場人物にもかなりの影響を及ぼしていると考えられる。松本氏の論文にも一部触れられているが、特に二条の自己造型に関していえば、精読するとその外的資質や内面造型に『夜の寝覚』がきわめて重要な役割を担っていることが理解できる。それらのことについては、今後稿を改めて考察したい。

注

(1)「『夜の寝覚』の『とはずがたり』への影響」(『古代文化』昭和五五年一一月。後に『中世女流日記文学の研究』(明治書院　昭和五八年)に再録)。なお、松本氏は『中世宮廷女性の日記『とはずがたり』の世界』(中公新書昭和六一年)の中で、再び『夜の寝覚』の影響について触れておられるが、特に新たな見解は示されていない。

(2)その他の例証として、小沢良衛氏が「『とはずがたり』における雪の曙」(『とはずがたり・中世女流日記文学の世界(女流日記文学講座第五巻)』勉誠社　平成二年)において、二条の「雪の曙」に対する意識の流れと彼の呼称の変化が対応していることを指摘しておられる。

(3)本稿においては公人としての「雪の曙」は考慮に入れない。総合的な人物造型を考察するためには分離してはならないが、本稿の主眼は『夜の寝覚』の摂取の様相を解明することであるので、あえて範囲を限定する。

(4)室町時代に成立したと考えられる、『夜の寝覚』の改作本『夜寝覚物語』には、中間欠巻部に位置する部分に男主人公が女主人公の懐妊の予知夢を見るという左の場面があり、おそらく『夜の寝覚』にも存在していたであろうと見なされている。老左大将に嫁ぐことになっている女君が男君の胤を宿すことを暗示したもので、話の展開、夢の具体的な内容ともに、『とはずがたり』⑥の場面に類似しており、この事例も一つの傍証となり得るだろう。

あかつきがたにちとまどろみ給ふ御夢に、いとうるはしくびんづらゆひたるわらはの、こがねのしきしにつら(ヽカ)める物をとりいだして、「これは御もとなるたまのたぐひなり」とてたてまつりたるを、ひきあ

けて見給へば、しきの一のまきの、たまのぢくしたるなりけり。めでたきふみのさまかなと見給ふに、このをんな君、「これこそほうらいの山のたまのえだよ。一えだは御もとにあり。これはまろがにせん」とてとり給ふを、わがもとなるにならべてこそもためと思て、とらんとすれば、「しばしなをこれは、をきてみん。つゐにはたてまつらん」とて、ふところにひきいれ給ふ。

（5）「雪の曙」を西園寺実兼とすれば、史実上の昇官の類似も指摘できる。『夜の寝覚』の始まりに、男主人公は権中納言として登場する。その後、大納言、大将、内大臣、右大臣を経て、末尾欠巻部においては関白にまで昇りつめている。一方、西園寺実兼は『とはずがたり』の最初の年、文永三年に、同じく権中納言として現れる。『公卿補任』によれば、兼左衛門督（同六年）、権大納言（同八年）、兼春宮大夫（建治元年）、大納言兼右大将（正応元年）、内大臣（同二年）、太政大臣（同四年）とあって、『夜の寝覚』の男主人公と類似した経歴を見ることができる。両者の出世コースが特色あるものとは言えず、単なる偶然の一致にすぎないかもしれないが、このような事実もきっかけとなって、『夜の寝覚』の男主人公を基準とした「雪の曙」の造型が行われたのではないだろうか。

（6）大半の研究者は性助を支持するが、宮内三二郎氏、最近では松本寧至氏が法助説を唱えておられる。

（7）佐藤育氏「『問はず語り』の物語性―『源氏物語』の女性達と二条―」（『広島女学院大学国語国文学誌』昭和五六年十二月）に、この場面が『源氏物語』若菜下巻の一場面を踏襲しているとの指摘があるが、心情面、女君の行動、また後の展開を考えると、『夜の寝覚』との関係は無視できない。

（8）関根慶子氏「寝覚物語における「帝闕入事件」を考える」（『源氏物語及び以後の物語　研究と資料（古代文学論叢第七輯）』武蔵野書院　昭和五四年）

引用は、『とはずがたり』は新潮日本古典集成（新潮社）、『夜の寝覚』は日本古典文学全集（小学館）、改作本『夜寝覚物語』は『物語文学の研究―本文と論考―』（金子武雄著　笠間書院　昭和四九年）に拠る。

（あべ・まゆみ　本学大学院博士後期課程）